

# 「この人この経営」



## ユリの花形に写す夢

坂本勝敏さん (37歳)

〒651-11615  
兵庫県神戸市北区淡河町萩原402  
☎078(959)0492

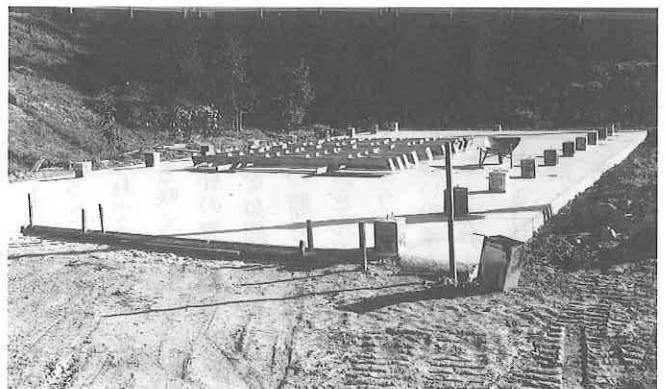


新神戸駅からトンネルを抜け車で30分、六甲山系の北、なだらかな山並みにかこまれた小さな盆地、淡河（おうご、神戸市北区）は登録品種名「神戸新鉄砲ユリ」の産地として知られている。そのなかでも有数の生産農家で「坂本鉄砲ユリ」の独自ブランドで出荷している坂本さんを訪ねた。

祖父の康一さん、そして父の勝さんから受け継いだ家業をになう若い経営者は勝敏さん。坂本さんには数年前、農業史や農業問題を考える研究会で一度お会いしたことがあった。御自身の営農をお話しいただき、あなるほど、それはそうだ、と何度も感じ入ったことをよく憶えている。

### 3トンのパワーショベル がまず目についた

どこかの工事業者が置いているのか、しかし最近に使った形跡はないななどと思っている私の顔を見ていた勝敏さん、「これ、うちの機械です。温室を建てたとき柱を立てるのに、父が中古を買ってきました」。自分たちでできることは、とことん自前です。温室内の設備も全部自作である。その温室の向こうでは倉庫を建てているところで、底を抜いた1斗缶を型枠にしてコンクリートが打たれており、柱の基礎ができていた。中古で済



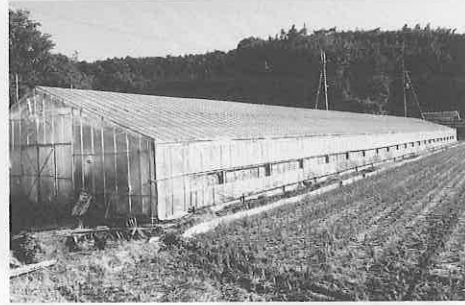
坂本さんは中古のパワーショベルを使ってハウスを建てたり、一斗缶を型枠にしてコンクリートを打ち、倉庫を作ったりと、何でも自分でやる



ユリの球根をばらして来作の準備をする父親の勝さん



レフランプとステンレスの灰皿を利用した手製の硫黄燻蒸器



3棟あるバラの温室。換気には気を配っている



ピッチの短い特注のユリの苗移植機

ませられるなら中古で済みます。温室を作った時も、どこかで解体するといふ話を聞いて、譲ってもらった建材を使った。

バラの温室が3棟あるが、いずれも天窓がついていない。側窓をあけて換気するが、窓の内側にはビニールのカーテンがあり空気は上へ導かれ、バラに直接あたらないようになっていた。硫黄の燻蒸器は手製である。「これだけの数、揃えようとしたらいくらになります?」。空き缶の中にレフランプを仕掛け、その上にステンレスの灰皿を載せただけのものである。

ユリの畑は7反ほどあり、定植には1条植えの移植機を3年前から導入している。試作機を持ち込んでもらって検討し、植付けのピッチを10cmに改造したものである。6日に一度はせねばならない消毒のため、ラジコンヘリでの散布も検討したが、ブームスプレヤーを導入することにしたという。

トラクタは3台、1台はキャビン付きの60馬力でも共同所有である。共同所有の相手はまちまちで、それも1対1の共同だけではなく、1対2、3、4とこれもまちまちである。「どの機械がどこ共同所有しているか、わからんようになりますわ」。もちろん混乱することもないの

であろうが、とにかく屈託がない。

ラッパの花形は  
100%を目指すくらいの気持で

特に変異率が高いユリ栽培でいかにして花形も草形もいいものをそろえるか。花はラッパ状に開いた先端がよく曲がっていることがポイントである。それを「回転がよい」というのだそうである。勝さんのようなベテランでもつぼみが開くときの先端を見るまでは「回転の具合」が予想できないという。花と茎の角度、葉の形や長さ、着生の間隔と揃い方も商品価値にかかわる。メリクロンより実用的なりん片繁殖で元を固定し、種子を確保している。よい花を見て球根をとるが、気に入った花は1反に2、3本しかない、それでも、そのりん片からおかしな花も咲くという。

床の間に一杯の賞状や楯が置いてある座敷で話をお聞きした。話し手はもつぱら父の勝さん。その傍らで勝敏さんは、勝さんが話すのを楽しんでるかのようによく合意の槌を打ち、ときには合意の手を入れる。

話はユリのことばかり。勝さんは土耕のバラ作りでも技術が高く、そのキャリアを生かして8年前に水耕に切り替えたと聞いていたので、バラのほうに話を持っていくようにしたら、微



坂本さん宅にお伺いするたびに、驚かされたり感心させられている。創意工夫が営農のいたるところに組み込まれているからである。

その具体的な例をバラの養液栽培であげてみよう。ハウスに入ると、真っ先に目につくのが地表に敷きつめられた稲わら、もみガラ、バラの剪定くずである。

一般的な養液栽培施設では、栽培ベッドへの雑菌の侵入を防止するため、地表にプラスチックフィルムや小石を敷きつめる。土と遮断するのだが、これにはいくつかの問題が存在する。基盤である土壌からの水分蒸散が見込まれないために昼間の室内の過乾燥によるチップバーンなどの生理障害を引き起

しやすくなるし、土耕と異なり堆肥などの有機物の施用がまったくないために、土壌からの炭酸ガスの補給がまったくない見込まれないことなどである。前者は特に室温が高くなる夏場で問題となり、後者は換気機会が少なくなる冬場で問題となる。

稲わらなどの有機物を地表に施せば、室温が上昇するに従い水分を蒸散して室内湿度の低下を緩和する。夜間の室温低下に伴う結露を吸着して植物の「濡れ」を防ぎ、病害の蔓延を抑制する。地表との接点では微生物が活発に働き、炭酸ガス補給の役目を果たすなどの効果がある。

土を否定する養液栽培に土耕の技術を見事に組み入れた工夫といえるであろう。(重久正次)

笑みながら「バラは、ほろほろですわ」。なんか分かったような、分からないような気持ちで「はア」といったら、またユリの話にもどってしまった。ラッパの花形を100%にするという夢はいつになったら現実になるか、いや、夢は持ちつづける。そう語ったときの眼差しは、どこか遠くのなにかに向けていた。

ユリを話すとき、勝さんの目はいつも柔和であった。ただ一度、個別出荷に切り替えた話になったときをのぞいて。以前から指摘されてきた共同選別・出荷の問題点をここでも考えさせられた。しかし、外部のことをどうして仕入れるか、市場情報をいかにして入手するか等、出荷のテクニッ

クに話が移ったとき、その目は再び柔和にもどっていた。

その座敷の鴨居にも賞状が掛かっている。一番古いものは昭和30年代、まだ淡河村であったころ祖父の康一さんがセロリの品評会で得たものである。祖父から父へ、セロリからカーネーション、バラ、新鉄砲ユリへ、そして若い経営者、勝敏さんへ。新鉄砲ユリの淡河にも高齢化の波が迫っている。今年も70歳過ぎという年齢に勝てず2戸か3戸が栽培を止めた。しかし、独自ブランドで出荷を続けている坂本さんの意気はさかんである。

(堀尾尚志)



独自ブランドで鉄砲ユリとバラを出荷している

**堀尾尚志** (ほりおひさし)  
神戸大学農学部教授。専攻は農業機械。かたわら農業史の研究を続けてきた。著書に『ものと人間の文化史・農具』(共著)など。最近は工学と人文・社会科学の境界で研究をしている。

**重久正次** (しげひさしようにじ)  
重久農事研究会主宰。長年、肥料会社の技師として各地を回り施肥・防除を中心に営農相談に乗ってきた。その実績を生かして現職。坂本さんもそのとき出会った一人。